

れんごう中越地協

第1047号2080.8.21
連合中越地域協議会
長岡市愛宕3-7-24
TEL 0258-86-0111
FAX 0258-86-0884
発行人 矢島 良彦
定価 1部10円
購読料は会費に含まれる



長岡市内で平和関連事業

31日と1日、平和を願って祈り

長岡空襲から75年。コンサート・平和祈願祭・祈念式典等

毎年、7月下旬から8月上旬にかけて平和関連事業が行われていた。今年も、新型コロナウイルス禍により内容と規模に制限が加えられた。このうち長岡市内では、7月31日(金)に平和の森公園で平和の森コンサート実行委員会メンバーによる演奏、8月1日(土)には、同公園で平和祈願祭、アオーレ長岡で「長岡市平和祈念式典」が行われた。一方、「ながおか平和フォーラム」は、中止された。

アオーレ長岡では、8月1日(木)午前9時から長岡市平和祈念式典が開かれた。参加者約200人で、席の間隔を1メートル以上開けて配置された。式典は、「語り継ぐ平和への想い」の放映



に続き、黙とうが行われた。次の主催者あいさつで磯田市長は、今ある平和な生活は先人の努力の上に成り立っていること、空襲体験者の高齢化、風化させないため語り継ぐことが未来を守り、続けていくことの責務や恒久平和に向け粘り強く取り組み等を表明。続いて、丸山市議会議長あいさつ後、代表者による献花が行われた。

また、長岡空襲のお話では、当時11歳で平潟神社近くに住んでおられた金子登美さんが、「キラキラ光る星空の下で、7歳上の姉とのおしゃべりが最後となった」、「夜10時半頃に空襲警報が鳴り、防空壕に逃げ込ん

だ」、「ドカーンという音に、南無阿彌陀仏を唱えているお年寄りもいた」、「手を繋いで防空壕から出たら、夕焼け空のように赤く染まっていた」、「父と姉は柿川の方へ走り出したが川は火の川で、姿を見失い、母と逃げ惑った」、「布団をかぶって母と逃げたが、気が付いたら家の空き地

1日(土)午前8時から、平和の森公園(長岡市本町3)で、新教組長岡支部と長岡非核平和都市宣言市民の会による「2020年平和祈願祭」が行われ、例年の小・中学生と市民が集った。

これは、長岡空襲で亡くなった子供たちや教職員など、犠牲となった方々への追悼の意を表するとともに、

長岡空襲を語り継ぎ、非核・平和を誓う子どもたちを育てることを目的としている。祈願祭では平和像の

の畑に避難した。26年前に空襲の記憶を忘れないために運動を始めたことや、広島から譲り受けたアオギリ2世が力強く元気になっていると述べた他、慰霊の気持ちをもって運動を続けていきたい等と述べた。次に、羽賀連合中越地協副議長が、先の見えない状況

だが、来年は大勢でコンサートが開かれることを願っていると挨拶。続いて、金子登美さんが、空襲当日の悲惨な体験と未来への想いが語られた。その後は、実行委員会メンバーなど30名程で、慰霊を込めての演奏が行われ、午後7時過ぎの灯籠流しで第26回が終了した。

に戻り穴に入った。その後、穴から柿川への道が見えたようで、一生懸命柿川めがけて走った。川の油は流れ去っていて、中で夜が明けるのを待った。「夜が明けると長岡駅が見え、亡くなった方があちこちに横たわっていた。防空壕には人が入ったまま亡くなっていた。残酷でみじめであった」、「60歳まで空襲の話はしなかったが、亡くなった方が哀れでならないので、話しはじめた」、「大勢の犠牲者が遺してくれた平和。何にもない焼野原から育ててくれた人」等と語られた。

最後は、中学生が非核平和都市宣言を朗読して、長岡市平和祈念式典を終えた。

また、折り鶴プロジェクトで集められた1万羽を超える千羽鶴が奉納された。

今年度のコンサートは、7月31日(金)午後6時30分に開会した。

今年度のコンサートは、7月31日(金)午後6時30分に開会した。

ニューノーマルとは？直訳すると、「新たな常態・常識」という言葉になる。連日猛威を振るっている新型コロナウイルスの影響によって、世の中はニューノーマルな働き方やニューノーマルな学習環境、家庭環境への変革が求められているのだが、『近年の異常気象』これもニューノーマルと捉えなければいけないと感じる▼毎年耳にする言葉として、『〇〇年に1度の大雨』。毎年〇〇年に1度の大雨が降るのであれば、それはもはやニューノーマルである。猛暑も同じである。本来の猛暑の意味としては、「平常の気温と比べて著しく暑い時」のことである。近年では毎年のように大気温40℃近くを

記録している、この状態が「新たな常態・常識」となっているのではないかと。▼2007年以降は1日の最高気温が35℃以上の日のことを「猛暑日」というようになったが、世の中の人たちは「猛暑日」でも遊びに出かけるし、普通に仕事もしている。この状態に慣れたくはないものだが、世の中のニューノーマルとして気づかないうちに適応できてしまっている。やはり言葉でいうなら「ウイズ猛暑」だろうか。「ウイズコロナ」もニューノーマルとなりつつある途中だが、これは気づかないうちでは遅い。コロナウイルスと真摯に向き合い『新しい生活様式』を実践し第2波、第3波に備えたい。

幹事(教宣文化部) 円山 新

記録している、この状態が「新たな常態・常識」となっているのではないかと。▼2007年以降は1日の最高気温が35℃以上の日のことを「猛暑日」というようになったが、世の中の人たちは「猛暑日」でも遊びに出かけるし、普通に仕事もしている。この状態に慣れたくはないものだが、世の中のニューノーマルとして気づかないうちに適応できてしまっている。やはり言葉でいうなら「ウイズ猛暑」だろうか。「ウイズコロナ」もニューノーマルとなりつつある途中だが、これは気づかないうちでは遅い。コロナウイルスと真摯に向き合い『新しい生活様式』を実践し第2波、第3波に備えたい。

平和宣言

1945年8月6日、広島は一発の原子爆弾により破壊し尽くされ、「75年間は草木も生えぬ」と言われました。しかし広島は今、復興を遂げて、世界中から多くの人々が訪れる平和を象徴する都市になっています。

今、私たちは、新型コロナウイルスという人類に対する新たな脅威に立ち向かい、腕もがいていますが、この脅威は、悲惨な過去の経験を反面教師にすることで乗り越えられるのではないのでしょうか。

およそ100年前に流行したスペイン風邪は、第一次世界大戦中で敵対する国家間での「連帯」が叶わなかったため、数千万人の犠牲者を出し、世界中を恐怖に陥おとしいれました。その後、国家主義の台頭もあって、第二次世界大戦へと突入し、原爆投下へと繋がりました。

こうした過去の苦い経験を決して繰り返してはなりません。そのために、私たち市民社会は、自国第一主義に拠ることなく、「連帯」して脅威に立ち向かわなければなりません。

原爆投下の翌日、「橋の上にはズラリと負傷した人や既に息の絶えている多くの被災者が横たわっていた。大半が火傷で、皮膚が垂れ下がっていた。『水をくれ、水をくれ』と多くの人が水を求めている。」という惨状を体験し、「自分のこと、あるいは自国のことばかり考えるから争いになるのです。」という当時13歳であった男性の訴え。

昨年11月、被爆地を訪れ、「思い出し、ともに歩み、守る。この三つは倫理的命令です。」と発信されたローマ教皇の力強いメッセージ。

そして、国連難民高等弁務官として、難民対策に情熱を注がれた緒方貞子氏の「大切なのは苦しむ人々の命を救うこと。自分の国だけの平和はありえない。世界はつながっているのだから。」という実体験からの言葉。

これらの言葉は、人類の脅威に対しては、悲惨な過去を繰り返さないように「連帯」して立ち向かうべきであることを示唆しています。

今の広島があるのは、私たちの先人が互いを思いやり、「連帯」して苦難に立ち向かった成果です。実際、平和記念資料館を訪れた海外の方々から「自分たちのこととして悲劇について学んだ。」「人類の未来のための教訓だ。」という声も寄せられる中、これからの広島は、世界中の人々が核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて「連帯」することを市民社会の総意にしていく責務があると考えます。

ところで、国連に目を向けてみると、50年前に制定されたNPT（核兵器不拡散条約）と、3年前に成立した核兵器禁止条約は、ともに核兵器廃絶に不可欠な条約であり、次世代に確実に「継続」すべき枠組みであるにもかかわらず、その動向が不透明となっています。世界の指導者は、今こそ、この枠組みを有効に機能させるための決意を固めるべきではないのでしょうか。

そのために広島を訪れ、被爆の実相を深く理解されることを強く求めます。その上で、NPT再検討会議において、NPTで定められた核軍縮を誠実に交渉する義務を踏まえつつ、建設的対話を「継続」し、核兵器に頼らない安全保障体制の構築に向け、全力を尽くしていただきたい。

日本政府には、核保有国と非核保有国の橋渡し役をしっかりと果たすためにも、核兵器禁止条約への署名・批准を求める被爆者の思いを誠実に受け止めて同条約の締約国になり、唯一の戦争被爆国として、世界中の人々が被爆地ヒロシマの心に共感し「連帯」するよう訴えていただきたい。また、平均年齢が83歳を超えた被爆者を始め、心身に悪影響を及ぼす放射線により生活面で様々な苦しみを抱える多くの人々の苦悩に寄り添い、その支援策を充実するとともに、「黒い雨降雨地域」の拡大に向けた政治判断を、改めて強く求めます。

本日、被爆75周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

令和2年（2020年）8月6日

広島市長 松井一實

長崎平和宣言

私たちのまちに原子爆弾が襲いかかったあの日から、ちょうど75年。4分の3世紀がたった今も、私たちは「核兵器のある世界」に暮らしています。どうして私たち人間は、核兵器を未だになくすことができないのでしょうか。人の命を無残に奪い、人間らしく死ぬことも許さず、放射能による苦しみを一生涯背負わせ続ける、このむごい兵器を捨て去ることができないのでしょうか。

75年前の8月9日、原爆によって妻子を亡くし、その悲しみと平和への思いを音楽を通じて伝え続けた作曲家・木野普見雄さんは、手記にこう綴っています。……………

私の胸深く刻みつけられたあの日原子雲の赤黒い拡がりの下に繰り展げられた惨劇、ペロペロに焼けただれた火達磨の形相や、炭素のように黒焦げとなり、丸太のようにゴロゴロと瓦礫の中に転がっていた数知れぬ屍体、髪はじりじりに焼け、うつろな瞳でさまよう女、そうした様々な幻影は、毎年めぐりくる八月九日もなれば生々しく脳裡に蘇ってくる。……………

被爆者は、この地獄のような体験を、二度とほかの誰にもさせてはならないと、必死で原子雲の下で何があったのかを伝えてきました。しかし、核兵器の本当の恐ろしさはまだ十分に世界に伝わってはいません。新型コロナウイルス感染症が自分の周囲で広がり始めるまで、私たちがその怖さに気づかなかったように、もし核兵器が使われてしまうまで、人類がその脅威に気づかなかったとしたら、取り返しのつかないことになってしまいます。

今年は、核不拡散条約（NPT）の発効から50年の節目にあたります。この条約は、「核保有国をこれ以上増やさないこと」「核軍縮に誠実に努力すること」を約束した、人類にとってとても大切な取り決めです。しかしここ数年、中距離核戦力（INF）全廃条約を破棄してしまうなど、核保有国の間に核軍縮のための約束を反故にする動きが強まっています。それだけでなく、新しい高性能の核兵器や、使いやすい小型核兵器の開発と配備も進められています。その結果、核兵器が使用される脅威が現実のものとなっているのです。

“残り100秒”。地球滅亡までの時間を示す「終末時計」が今年、これまでで最短の時間を指していることが、こうした危機を象徴しています。

3年前に国連で採択された核兵器禁止条約は「核兵器をなくすべきだ」という人類の意思を明確にした条約です。核保有国や核の傘の下にいる国々の中には、この条約をつくるのはまだ早すぎるという声があります。そうではありません。核軍縮があまりにも遅すぎるのです。

被爆から75年、国連創設から75年という節目を迎えた今こそ、核兵器廃絶は、人類が自らに課した約束“国連総会決議第一号”であることを、私たちは思い出すべきです。

昨年、長崎を訪問されたローマ教皇は、二つの“鍵”となる言葉を述べられました。一つは「核兵器から解放された平和な世界を実現するためには、すべての人の参加が必要です」という言葉。もう一つは「今、拡大しつつある相互不信の流れを壊さなくてはなりません」という言葉です。

世界の皆さんに呼びかけます。平和のために私たちが参加する方法は無数にあります。今年、新型コロナウイルスに挑み続ける医療関係者に、多くの人が拍手を送りました。被爆から75年がたつ今日まで、体と心の痛みを耐えながら、つらい体験を語り、世界の人たちのために警告を発し続けてきた被爆者に、同じように、心からの敬意と感謝を込めて拍手を送りましょう。この拍手を送るという、わずかに10秒ほどの行為によっても平和の輪は広がります。今日、大テントの中に掲げられている高校生たちの書にも、平和への願いが表現されています。折り鶴を折るという小さな行為で、平和への思いを伝えることもできます。確信を持って、たゆむことなく、「平和の文化」を市民社会に根づかせていきましょう。

若い世代の皆さん。新型コロナウイルス感染症、地球温暖化、核兵器の問題に共通するのは、地球に住む私たちみんなが“当事者”だということです。あなたが住む未来の地球に核兵器は必要ですか。核兵器のない世界へと続く道を共に切り開き、そして一緒に歩んでいきましょう。

世界各国の指導者に訴えます。「相互不信」の流れを壊し、対話による「信頼」の構築をめざしてください。今こそ、「分断」ではなく「連帯」に向けた行動を選択してください。来年開かれる予定のNPT再検討会議で、核超大国である米国の核兵器削減など、実効性のある核軍縮の道筋を示すことを求めます。

日本政府と国会議員に訴えます。核兵器の怖さを体験した国として、一日も早く核兵器禁止条約の署名・批准を実現するとともに、北東アジア非核兵器地帯の構築を検討してください。「戦争をしない」という決意を込めた日本国憲法の平和の理念を永久に堅持してください。そして、今なお原爆の後障害に苦しむ被爆者のさらなる援護の充実とともに、未だ被爆者と認められていない被爆体験者に対する救済を求めます。

東日本大震災から9年が経過しました。長崎は放射能の脅威を体験したまちとして、復興に向け奮闘されている福島の人々を応援します。

新型コロナウイルスのために、心ならずも今日この式典に参列できなかった皆様とともに、原子爆弾で亡くなられた方々に心から追悼の意を捧げ、長崎は、広島、沖縄、そして戦争で多くの命を失った体験を持つまちや平和を求めるすべての人々と連帯して、核兵器廃絶と恒久平和の実現に力を尽くし続けることを、ここに宣言します。

2020年（令和2年）8月9日

長崎市長 田上富久